この一冊で日本の
歴史がひっくり返る
天照大神は男神だった？
衝撃の事実!!

空海の秀真伝

ホツマツタヱ

世界の四大文明は「日本人の祖先」が開いた！

空海ゆかりの千光寺
管長 上野 玄津
Ueno Genshin

琵琶湖（高島市）白髭神社の鳥居

平成出版

空海ゆかりの千光寺

管長 上野 玄津
Ueno Genshin

空海の秀真伝

ホツマツタヱ

平成出版

目次

プロローグ……4

第1章　3万8000年以上続いた縄文文明の古文書『秀真伝（ホツマツタヱ）』とは？……9

日本の歴史がひっくり返る「驚きの古文書」が発見された！
不思議な「神代文字」で書かれており、そこには神々から現代人へのメッセージが記されていた。

第2章　天照大神（あまてらすおおみかみ）は男性？『秀真伝（ホツマツタヱ）』のみが伝える、神々の人間ドラマ……55

実は「男」だった天照大神。なぜ私たちは「女」として学んできたのか。
これまでの歴史の常識が次々に覆され、そして、**クニトコタチの「トの教え」**の真実が明らかにされる。『秀真伝』が伝える「神々の世界」は、驚きと感動に満ちていた。

第3章　日本の歴史から消された女神「瀬織津比賣（姫）」の真実……93

今、大人気の「瀬織津姫」は、なぜ歴史から消されたのか？
天照大神の正妻だった女神は、全国の神社で、名前を変え、姿を変えて、この瞬間も人々に「愛と癒やし」を与え続けている。（「瀬織津姫」を祀っている代表的な神社の一覧表をご覧下さい）

第4章　超パワースポット「竹生島（ちくぶしま）」と「江州山千光寺」……129

琵琶湖に浮かぶパワースポット「竹生島」。その対岸にある「空海ゆかりの千光寺」。強く結ばれたレイライン（龍脈）を訪れると、あなたの意識が変わり、人生が変わる。

第5章　スーパースター「空海」とは何者か？……163

空海が歩んだ大冒険の物語が始まる。そして確信を得た「悟りの道」。それは秀真伝が伝える**「トの教え」＝「調和・共生の精神」**と融合する教えであり、現代を生きる人々を迷いから救い続けている。

第6章　「大日力」とは――大宇宙をあまねく照らす「大日如来」の「力」で幸せになる……205

大宇宙の根源から降り注ぐエネルギー「大日力」は、あなたを活かし、あなたを幸福にする。しかし、あなたは気づかない。著者の実体験を通じて言霊（真言）による「大日力」の偉大さを紹介する。

第7章　高島から世界へ「縄文文明」は、人類の源流だったのか？……243

『秀真伝』が伝える縄文人の精神・文化。その影響は世界に広がり、再び日本に戻ってきた。**チンギス・ハーンは神武天皇の子孫だった。**その事実が明らかにされた今、古代より脈々と引き継がれてきた『真の幸福への道』があなたの目の前に現われる！

プロローグ

●世界的にも不思議な４００万年前の古代湖「琵琶湖」には不思議なパワーがある

私は、高野山真言宗・千光寺派の僧侶（江州山・千光寺総本山管長）であり、空海の弟子です。僧侶になって30数年、様々な修行を重ね、また、人々の幸せを願って『空海』の教えを広める活動を行ってきました。

その私が、琵琶湖（滋賀県・高島市）を訪れたときのことです。空海と同行二人で、空海が辿ったであろう琵琶湖畔を巡っているとき、湖が一番大きく見える「外ヶ浜」で、湖水を少し手にすくい上げてみました。すると、全身にビリビリと電気が流れたような不思議な感覚があり驚きました。

宇宙の真理であり万物の根源である『大日如来』のパワー（大日力）は、地球上にあまねく降り注いでいますが、ここ琵琶湖では、そのパワーを全身で感じることができたのです（大日力については、２０１９年11月21日刊の拙著『空海の大日力』をご参照ください）。

この地こそ、空海の教えを広める真の地であるに違いない。そう悟った私は、修行と布教活動の拠

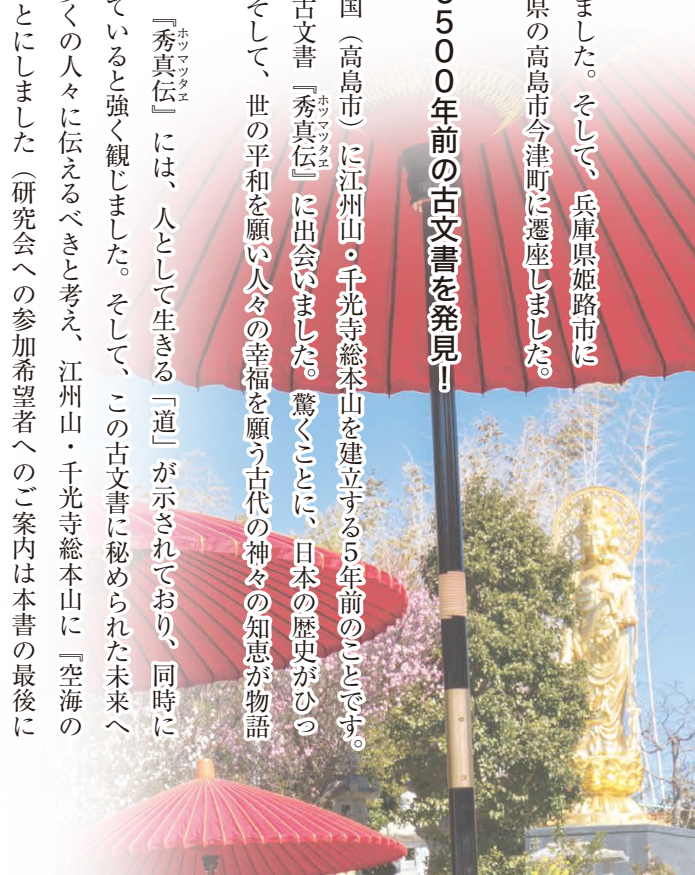
点を、琵琶湖畔に置こうと決心しました。そして、兵庫県姫路市にある雪彦山・千光寺総本山を滋賀県の高島市今津町に遷座しました。

●不思議な文字で書かれた6500年前の古文書を発見！

東に「竹生島」が浮かぶ近江の国（高島市）に江州山・千光寺総本山を建立する5年前のことです。不思議な神代文字（かみよ）で書かれている古文書『秀真伝（ホツマツタヱ）』に出会いました。驚くことに、日本の歴史がひっくり返る真実が書かれています。そして、世の平和を願い人々の幸福を願う古代の神々の知恵が物語風に五七調で書かれています。

この古文書を読んだとき、私は『秀真伝（ホツマツタヱ）』には、人として生きる「道」が示されており、同時に空海の教えに繋がる知恵が綴られていると強く観じました。そして、この古文書に秘められた未来へのメッセージを、現代を生きる多くの人々に伝えるべきと考え、江州山・千光寺総本山に『空海の秀真伝（ホツマツタヱ）研究会』の本部を設けることにしました（研究会への参加希望者へのご案内は本書の最後に記載しています）。

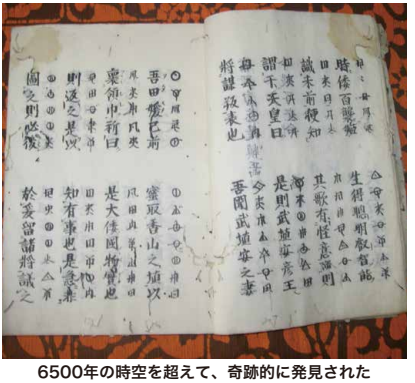
６５００年前に編纂されたとする『秀真伝（ホツマツタヱ）』は、単なる書物ではありません。古代の人々が国造りに費やした膨大なエネルギーと、幸福を願って平和に暮らしてきた人々の「魂」が宿っています。それゆえ、強力な「日本建国」のパワーを観じ取ることができます。



本書では、多くの人が「世紀末」と予言する不確かな時代において、間違いなく現代を生きる人々を幸せへと導く真のパワーの一つとして、この『秀真伝（ホツマツタヱ）』について詳しく説明していきます。

もう一つ、日本最大の琵琶湖には神々が発する不思議なパワーの源である「竹生島」があります。竹生島は観光地として有名ですが、古来より日本人の心の聖地であり、空海が真言密教の修行のための道場を開いた超パワースポットの「島」です。それゆえ、江州山・千光寺総本山では、祈願成就のための「竹生島参拝」を、とても大事な行事として執り行っています。

私は、空海の真言密教を根本として、「竹生島」と「秀真伝（ホツマツタヱ）」の強力なパワーを享受することができれば、この混迷の時代を生きる人々が必ず幸福への「道」を歩んでいけると確信しています。



6500年の時空を超えて、奇跡的に発見された
『秀真伝（ホツマツタヱ）』

●空海の「人生成功術」「幸福への道」とは

空海は真言密教の開祖であり、「高野山（８１６年）」や京都の「東寺（８２３年）」を根本道場として活躍なされたスーパースターです。その『空海』は、「人は、自分のなかに『宝』を持っていることを知らず、過ちをおかす」という格言を残されています。人は誰も生まれながらにして素晴らし

い可能性を持っています。しかし、その可能性に気づかないまま生きていると、悩んだり迷ったりする人生で終わってしまうということを諭している言葉です。

では、その可能性に気づき、人生を成功させるためには、どうすれば良いのでしょうか。

空海の真言密教には、「三密」という修行法があります。

①身密（しんみつ）＝両手で「印（印契）」を結び、身の行いを整える。

②口密（くみつ）＝仏の言葉である「真言（マントラ）」を口で唱える。

③意密（いみつ）＝心を整えて仏の境地に意識を集中させる。

この仏教の秘「密」の「教」えである『密教』の修行により、弘法大師・空海（仏様）と一体になることができ、大宇宙の悟りへと近づくことができます。ただ、仏門に入った僧侶にとっては基本的な修行ですが、普通に暮らす人々は「修行」と聞いただけで、これはキツイと思ってしまいます。

そのような人々のために、私は日常生活における『三密』の方法を説いています。

①『身』やりたいことを、身体を動かして実際にやってみよう。

②『口』必ずやれる。できるという前向きな言葉を口にしよう。

③『意』迷わず夢の実現に向かう強い意志（チャレンジ精神）を持とう。

これは、自己を啓発して、願望を実現させるための基本です。願望を必ず達成させるという意識（イメージ）を強く持ち、それを積極的に口で言葉にして、意識を集中して行動（チャレンジ）する。こ

れこそが人生を「成功」あるいは「幸福」にさせる一番の近道なのです。

ただ、毎日忙しく働いて生活してストレスを感じる中で、このような意識を保ち続けることは、なかなか難しく、分かっていても忘れてしまいがちです。そうならないための方法は、自身が生まれながらにして持っている可能性に気づかせてくれる機会を得ることです。そして、自身の可能性を引き出してくれる「大日パワー」を享受することです。

そのために、私は、空海の教えを学ぼう、「竹生島」に詣でて神々のパワーを頂こう、『秀真伝（ホツマツタヱ）』から現代を生きる知恵と「道」を学ぼうと、皆様にお勧めしたいのです。

本書は、その意味と「幸せへの道」を探求する内容になっています。読み進めていくと、いままで気づかなかった不思議で強大な「ラッキー」パワーの存在を知ることができ、あなたの心も体も元気になり人生観が変わると確信しております。

「竹生島参拝」空海と同行二人の旅を楽しむ

２０２６年（令和８年）６月23日

『空海の秀真伝』研究会

会主　上野　玄津

第1章

3万8000年以上続いた縄文文明の古文書『秀真伝（ホツマツタヱ）』とは？

琵琶湖

2000年以上の歴史を記憶している「滋賀県高島市『白髭神社』の湖上鳥居」

●私は、空海の教えを現代に伝える「弟子（代理人）」

『空海』は、四国（香川県善通寺市）に生まれ、佐伯直（さえきのあたい）の血筋で藤原氏の血筋も入っている真言宗の宗祖です。俗名は佐伯真魚（まお）であり、誕生より今日まで１２５２年のときを超え、今も多くの人の心を照らし続ける『スーパースター空海（７７４年～８３５年）』です。

空海は、土木・医療・教育・文化、国家のあらゆる分野に光を灯し、護摩祈祷など願望達成術により人々を「幸せ」へとお導きいただける「真言密教」という体系を日本の大地に深く根づかせました。その根は枯れることなく、高野山の奥の院では今もなお、『即身成仏』により宇宙の真理（大日如来）と自己が一体となる悟りの境地を実践され続けていらっしゃいます。

しかし、空海の弟子としての私はこう思わずにはいられません。

もし空海が今この時代を生きていたなら、人々に何を伝えようとするだろうかと。

ＳＮＳには毎日、世の中に対する不安と怒りと恐怖の情報が波のように押し寄せており、人々の心は今にも流されてしまう小舟のように、分断の波間に漂っています。しかし、船に確かな「錨（いかり）」があれば、どれほど激しい嵐が来ても流されることはありません。たとえ大きな波に揺さぶられたとしても、嵐が過ぎ去れば元の静かな場所に戻って来られます。

私にとって信仰心とは、まさにこの「錨（いかり）」のことです。先祖や親への感謝、自分を生んでくれた土

地への感謝、そして自分のためだけでなく家族や周りの人の「幸せ」を願う誓い。それら一つひとつの温かな想いが、心の「錨（いかり）」に重さを与え『人の道』へと導いてくれます。

その重みこそが、どんな嵐の中でも、私たちを本来あるべき自分へと繋ぎ止めてくれるのです。きっと空海なら、このことを現代の言葉でやさしく伝えたに違いありません。「空海の代理人」として私が今、琵琶湖（高島）江州山（ごうしゅうざん）千光寺に「空海の秀真伝（ホツマツタヱ）」研究会の本部を設立した理由。それは、空海から授かった「真言密教」と『秀真伝（ホツマツタヱ）』という深遠な智慧を、今の時代に生きる人々の心に真っ直ぐ届く言葉へと翻訳し、私たちの「心」の持ちよう、どう歩むべきかの『人の道』を本書にて示すためです。

自他ともに認める「空海の一番出来の悪い弟子」が、なぜその大役を担おうとしているのか。私は、今年65歳になりました。世間では定年を迎え、余生を静かに過ごす年代かもしれません。しかし、私の人生の時計はここから力強く動き始めました。これから92歳までの限られた時間は自分のためだけに使うのではなく、多くの判断ミスや大失敗した私自身が、今日まで「幸せ」に生きてこられたことへの深い感謝を込めて、空海の生き様とその教え

江州山千光寺の「空海の秀真伝」研究会本部

を現代の言葉で具現化し続けたい。そのために私のこれからの27年間を捧げたい。それこそが、残された人生をかけた私の使命なのです。

私は空海の背中に寄り添い、「同行二人」で修行の道を歩み、ときにはその想いを代弁する「代理人」として、皆さんと同じ目線に立ち、空海の「言葉（言霊）」を届けたい。出来の悪い弟子だからこそ、立派な鎧など脱ぎ捨てて、ありのままの真実を語れると信じています。

空海が生涯をかけて追い求めた「真実の言葉（言霊）」、それが「真言」です。真言密教とは、仏の智慧や宇宙の真理が込められた言葉（波動・振動）から発生する「大日力」により人々が求める幸福への究極点を示す『人の道』の教えです。その「真言」を現代を生きる人々に、分かりやすくお伝えしたいのです。

●近江の国（江州）での6500年前の超古文書『秀真伝』との出会い

私は、この「真言」を何千回、何万回と唱え、「密教」の厳しい修行を重ねてきました。そして、真言密教の開祖・空海が求めていた究極の真理を、私もまた追い求めていました。空海が中国に渡って「密教」を学び、日本で真言密教を創立する以前から、空海は山岳修行を重ね、究極の真理を探し求めていました。

その若き日の空海（幼名：俗名は佐伯真魚）は、修験道の山岳修行、そして神道から多くを体験し大自然の「力」を学んでいます。私は、それだけではないはず、きっと空海に大きな影響を与えた何かが必ずあるはずと考え、その何かを探し追い求めてきました。

そして、その何かを、どこまでも遡った先に待っていたのが、本書のテーマである『秀真伝』でした。これまで日本の古代史（神々の時代）をまとめた初めての書物は、「記紀」と称される『日本書紀』と『古事記』だと言われていました。しかし、その記紀より遙か昔に書かれた『秀真伝』が発見されたことにより、これまでの常識が覆りました。記紀には書かれていない話、また記紀とは異なる話が詳しく書かれていたのです。そのため、今日では、日本書紀や古事記を書くために参考にした原書が、実は『秀真伝』だったと解釈されています。

この古文書に触れた瞬間、私の腹の底には、抗いようのない確信がずしりと降りてきました。神話の世界の中に、3万8000年もの長きにわたり平和が続いていた縄文時代の人々の精神が見事に記録として描かれており、そこに秘められた不思議なパワーに圧倒されたからです（詳しくは第7章で説明します）。

空海も、この『秀真伝』から影響を受けたに違いないと確信を抱いた私は、古代の叡智を現代の言葉（現代の日本語）へと翻訳し、教科書とはまったく違う真実を「現代（未来へ）の叡智」として伝え広める必要があると決意しました。その一つの取り組みが本書の執筆です。

古文書である『秀真伝』は、今、間違った歴史を正しく理解して迷走する現代社会を正しい方向

へと導く知恵の書として注目を浴び始めています。その一例を紹介しながら、６５００年前の超古代書『秀真伝（ホツマツタヱ）』が伝える平和と幸福の道標『人の道』を詳しく説明していきます。

２０２５年の正月、多くの人々を驚かせる出来事がありました。私たちの日常に、突如として奇妙な、ある「謎」が投げかけられたのです。

それは、世界的なファストフードチェーン、マクドナルド日本法人が発信したＸ（旧ツイッター）での投稿でした。主力商品である「サムライマック」のプロモーションとともに、新年の挨拶として添えられた画像。そこには、現代の洗練された広告コピーとは似ても似つかない、不思議な文字が並んでいたのです。

「これは一体、何だ？」

「暗号か？それとも未知の言語か？」

ＳＮＳ上はたちまち騒然となりました。一見して判読不能なその文字列。それは、歴史の表舞台から長い間姿を消していた「ヲシテ文字」（本書34ページ図1と、37ページ図2をご参照ください）と呼ばれる、日本古代の神代文字だったのです。「ヲシテ文字」とは、教科書で学んだ約１５００年以上前に中国より伝来した「漢字」が日本に伝わるよりも遙か以前に使われていた日本固有の文字です。ひらがなやカタカナとはまったく異なる、幾何学的な形をしています。

「しょうがつも さむらいまっくたべてね」

そのメッセージは、「正月もサムライマックを食べてね」という親しみやすいものでしたが、事態はそれだけでは終わらなかったのです。この投稿に、現代のテクノロジーと未来を牽引する稀代の起業家、イーロン・マスク氏がすぐさま反応し、リポスト（再投稿）したのです。2億人を超えるフォロワーを持つ彼の指先一つで、古代日本の「ヲシテ文字」は、ロケットが宇宙へ駆け上がるような凄まじい勢いで国境を越え、世界中に拡散されたのです。

なぜ、最先端を走るグローバル企業や天才起業家が、6500年も前の「忘れられた文字」に惹きつけられたのでしょうか。単なる「サムライ」という言葉の響きや、エキゾチックなデザインへの興味だけだったのでしょうか。私はそうは思いません。そこには、混迷を極める現代社会において、人々が無意識のうちに渇望している「何か？」があったはずです。

「自分の信じる『道』を切り拓け」

その商品のキャッチコピーと、いにしえの日本人が宇宙の真理を刻んだ「ヲシテ文字」が融合したとき、時空を超えた強力なメッセージが現代人の心に突き刺さったのです。それは「そろそろ目を覚ましなさい」という、平和が3万8000年続いた縄文時代の神々や人々の営みを伝える約6500

年前の聖書より古い古文書『秀真伝（ホツマツタヱ）』から現代人へ、『人の道』へ導くための合図だったのでは？と私は考えています。

マクドナルドの「ヲシテ文字」広告を見て「クールだ」と感じた若者たちの直感は、決して間違っていません。そこには、物質的な豊かさや効率性ばかりを追い求め、疲弊してしまった現代人が、喉から手が出るほど求めている「本当の豊かさ」の源泉（オーラパワー）があるからです。

「効率よりも調和を」「支配よりも共存を」「対立よりも融合を」

世界の四大文明より古く栄えた縄文文明の日本人が、呼吸をするように息づいていたこの縄文文明の精神。約3万8000年続いた平和な縄文時代の精神こそ、環境問題や人々の争いごとに揺れる地球が、今まさに必要としているものです。遠い過去から届いたこの『秀真伝（ホツマツタヱ）』の教えは、現代の私たちが未来を切り拓くための「一番古くて、一番新しい答え」にほかなりません。

本書は、私たち悩める現代を生きる人々の心の奥底に眠る美しい『人の道』として、「奪い合わない清き『心』が磁石のようにすべての豊かさを呼び込む」その美しい精神を、もう一度呼び覚ますための「再発見の旅」です。読み進めるごとに「気づきのきっかけ」を幾（いく）つも得られることでしょう。

●学校の教科書で学んだ日本の歴史がすべて変わる

あなたは、日本という国の「本当のはじまり」を知っていますか？

多くの人の頭に浮かぶのは、学校の教科書で習った断片的な歴史かもしれません。あるいは、日本最古の正史とされる『古事記（712年）』や『日本書紀（720年）』、約1300年前のいわゆる「記・紀」神話を思い浮かべるでしょうか。

しかし、本書が問いかける日本建国の「本当のはじまり」とは、日本の歴史書として常識の「記紀」（『古事記』と『日本書紀』を合わせた総称）よりも遥か以前の話です。「記紀」が編纂されたのは、今から約1300年前のこと。それよりもさらに5200年も前、この日本列島には独自の文字を持ち、宇宙の真理を書き残せるほど精緻な縄文文明が存在していた――。そのことを今に伝えるのが『秀真伝』なのです。言い換えれば、『秀真伝』こそが、教科書には載っていない「日本の本当のはじまり」そのものなのです。私たちの常識を塗り替える、この一冊で日本の歴史がひっくり返る「真実の物語」がここから始まります。

約6500年前の歴史を記録した古文書『秀真伝』という言葉を初めて聞く人も多いでしょう。それは、現代を生きる私たちが、いつの間にか忘れてしまった「日本人のDNA」の結晶であり、光に満ちた歴史叙事詩です。この壮大な古文書は、全40巻、およそヲシテ文字で12万文字。そのすべてが日本人の耳に心地よい「五七調」の美しいリズムで奏でられています。本当の古代日本の歴史を観じてみてください。絶対に勉強になります。

実はこの『秀真伝』は、私たちが知る「記紀」には描かれなかった、ときの権力により隠された空

白を埋める「原典」であり「真実」です。約６５００年前の縄文時代の日本人の考え方や風習、そして現代の私たち日本人が今も大切にしている「心の原点＝心配りやおもてなしの精神」が、驚くほど生き生きと記されているのです。

『秀真伝（ホツマツタヱ）』の最大の特徴は、１万７００行に及ぶ叙事詩（じょじし）がすべて五七調の「歌」として構成されていることです。端々に散りばめられた言葉の掛け合わせ（ダブルミーニング）などの高度な文学的表現は、読む者を圧倒し、深い精神世界へと誘います。

そして『秀真伝（ホツマツタヱ）』を構成する全40章は、すべて「アヤ（章）」と呼ばれます。機織りの「織り（アヤ）」です。天から降り注ぐ不変の真理「天の道」を「縦糸」にして、人々の血の通った感情や日々の営みという「人の道」を「横糸」が交差しているからです。一文字一文字が精緻な法則（本書の27ページの写真をご参照ください）に基づいて配置され、美しい布を織りなすように、この物語は壮大な一巻のタペストリーとして構成されているのです。外側から見れば「１万７００行の五七調の歌集」。しかし内側に流れるのは、宇宙の真理と人間の営みが縦横に交差する「命の織物」です。その奥深さを一語で言い表すなら、これはまさに「幸せを織りなす百科事典」なのです。

その「織り」の奥深い日本人特有の精神が、たった一語の語源に凝縮されているのが、「君（キミ）」

高島市で発見された『秀真伝』完璧な40巻の写本

という言葉です。男神（陽）を表す「木（キ）」と、女神（陰）を表す「実（ミ）」。この二人の男女が互いを認め合い、調和の中で「君（キミ）」として一体となって初めて、建国という美しい模様が描き出されます。古代日本で使われていた「君」とは単なる権力者ではなく、陰陽（太陽と月、白と黒、表と裏……）の男性と女性の両方が支え合い、調和の中で民を慈（いつく）しむ「聖なるあり方」そのものを指していたのです。

さらに「ヲシテ」という文字と言葉。表の意味は、文字そのものを表していますが、ヲシテの「ヲ」は宇宙の始まり、「シ」は個々の存在、「テ」は調和的な働きを指す、もう一つの意味が込められています（本書の37ページの表をご参照ください）。『秀真伝（ホツマツタヱ）』は単なる歴史書を超えた、こうした美しい輝きが随所にあるのです。

『秀真伝（ホツマツタヱ）』という名には、「まこと（真）の中のまこと（真）の言い伝え」という意味が込められています。「ホ」は火（陽）を、「ツ」は水（陰）を、そして「マ」は真（誠）を象徴しています。つまり「ホツマ」とは、「神の誠（まこと）」を指し示しているのです。

「ホツマ」は漢字で書くと「秀真」。「ツタヱ」は「伝え・言い伝え」を表しています。「秀真国」とは、「秀でた本当の国＝日の本」。この「秀真」には、単に優れているという意味以上の「整っている」という深いニュアンスが含まれています。人々が穏やかに暮らし、礼儀を重んじ、誠実さと謙虚さを持って支え合う。その調和こそが、国の安寧（あんねい）を守り、人々の幸せを形作る。『秀真伝（ホツマツタヱ）』は、そんな「本当の美しさ」を具現化した「ホツマクニ（秀真国）」の崇高な日出る国としての日本の建国思想を、現

代の私たちに真っ直ぐに伝えてくれているのです。

ここからは、三つの扉を順番に開けていきます。

一つ目の扉は、『秀真伝（ホツマツタヱ）』という古文書の「正体」です。どこで生まれ、なぜ長い間隠されていたのか。その驚くべき発見のドラマをお伝えします。

二つ目の扉は、この書物の底に流れる「哲学」です。すでに縄文時代の日本人が当たり前のように認めていた天照大神（あまてらすおおみかみ）が日本の総氏神（そううじがみ）であるなら、国祖と呼ぶべき偉大な「クニトコタチ」の「ト・の教え」（調和の精

◉『秀真伝（ホツマツタヱ）』が、6500年前の真書である理由

書物としての『秀真伝』編纂は1～3世紀のことです。初代大物主クシヒコが記した古記を下敷きに、右大臣クシミカタマが口伝で受け継がれてきた古代の記憶を初めて文字にまとめ（1～27アヤ）、のちに景行天皇の時代にオオタタネコが補筆（28～40アヤ）して全40アヤ（章）が完成しました。

しかし重要なのは「いつ文字化されたか」ではなく、「そこに何が記されているか」です。『秀真伝』に刻まれた神々の歴史――大噴火、海の満ち引き、富士山の山体崩壊、気候の寒冷化――は、現代の地質学・気候学が突き止めた縄文時代の環境激変のタイムラインと、恐ろしいほどの正確さで一致しています。

時期	地質・気候の実証データ	秀真伝の記述
約7300年前	アカホヤ大噴火	歴史の幕開け背景
約6500年前	縄文海進の頂点	3代トヨクンヌ、人の姿として本格的な国造り開始
約5600年前	富士山の大規模山体崩壊	4代ウヒチニ（越前）、統治者の時代
		5代オオトノチの時代
約4200年前	急激な寒冷化	6代オモタルの時代、淡海安曇川の中州に中柱（宮建立）
約3000～2300年前	晩期寒冷化・稲作移行	7代イザナギ・イザナミが淡海で水田稲作を始動

約7300年前のアカホヤ大噴火により九州が壊滅し、縄文海進が頂点に達した約6500年前の過酷な統治。約5600年前の富士山大規模山体崩壊。そして約4200年前の急激な寒冷化と社会的混乱。さらに7代イザナギ・イザナミが「アワのうた」で民の言葉を正し、近江（琵琶湖周辺）で水田稲作を本格始動させた縄文晩期の記録まで――すべてが科学データと符合するのです。

後世の人間が頭の中で作り上げた創作であれば、これほどの一致はあり得ません。『秀真伝』は、約6500年前から日本列島に生きた先祖たちが実際に体験した地球規模の記憶を、一寸の狂いもなく口伝し続けた「本物の歴史書（真書）」なのです。

神）とは何か。それが今も、私たちの日常の言葉や習慣の中に生きていることに気づいていただけるはずです。

そして三つ目の扉が、最も驚くべき奇跡です。６５００年前の哲学が「音（言霊）」と「文字（形霊）」として今も私たちの細胞に宿っており、空海の教えの「真言（古代インドのサンスクリット語）」と同様に声に出すだけで心と体が整う「言霊」。その実践の力「アワのうた」（本書の44ページの表をご参照ください）をお伝えします。

どうか難しく考えずに、古代から届いた「タイムカプセル」の扉を一つひとつ開けるような気持ちで、現代人の99％の人が知らない衝撃の事実『秀真伝（ホツマツタヱ）』の世界に触れてみてください。

●４００万年前の古代湖「琵琶湖（高島）」で発見された奇跡の古文書

琵琶湖が「４００万年前の古代湖」と呼ばれることは、滋賀県に暮らす人々には馴染み深い事実です。しかし、世界の学術界においてその意味がどれほど特別なものか、あらためて思いを馳（は）せるとき、私は驚きを隠しきれません。

地球上で「古代湖」と認定されている湖は、約20しかありません。その第1位がロシアの「バイカル湖」第2位はアフリカの「タンガニーカ湖」。そして、第3位は私たちの「琵琶湖」です。

しかも、世界の学術界が琵琶湖に注ぐ眼差しは、「ただ古い」というだけではありません。「ビワコオオナマズ」や「ニゴロブナ」など、60種を超える固有種の進化を解明する「進化の展覧会場」なのです。そして湖底に眠る縄文時代からの１００以上の水中遺跡を擁する「水中考古学の宝庫」として、過去（地質・進化）・現在（環境保全）・未来（持続可能な共生）のすべてで、「国際湖沼会議」が「環境再生の世界的モデル」と称える聖地でもあるのです。

そんな奇跡の琵琶湖に面する「高島」で、もう一つの奇跡が静かに息づいていました。それが、この地で発見された古文書『秀真伝（ホツマツタヱ）』との運命的な出会いでした。

約１５００年前の仏教という体系に出会う前、私たち日本人の内側には、一体何が流れていたのか。数万年という歳月をこの小さな島国で生きてきた先祖たちは、何を見つめ、何に祈りを捧げていたのか。その源流を辿った先にあったのが、『秀真伝（ホツマツタヱ）』だったのです。

この古文書は、まるで自ら意志を持っているかのように、現代の「光」の中へと這い出してきました。すべての始まりは、１９６６年のある偶然の「出会い」でした。出版社の編集長だった松本善之助氏が、東京神田の古書店で埃（ほこり）にまみれた写本の一部を偶然手に取ったのです。そこに記されていたのは、見たこともない幾何学的な文字の羅列でした。「これは記号か？　いや、文字だ」――その瞬間、松本氏の指先に走った電撃が、歴史の闇に沈んでいた巨大なパズルを動かし始めました。

全体像を求めて奔走する松本氏は、写本の記述に導かれるようにして、琵琶湖の西エリア・滋賀県高島郡（現在の高島市）へと辿り着きます。そしてついに奇跡が起きました。旧家の尽力もあり安曇

川町にある日吉神社の、ひっそりとした神輿蔵の奥底から、『秀真伝』の全巻に及ぶ写本が完全な形で姿を現したのです。一人の先祖が心血を注いで漢訳を完成させ、神へと奉納したという魂の記録でした。そう、奇跡の扉が開いた場所こそ、江州山千光寺が運命の糸に引かれるように導かれた、ここ「高島」の地だったのです。松本氏を導いた「見えない糸」は、空海の引き寄せの「力」により、私をこの地へ呼び続けていた糸と同じものではないか――そう思った瞬間、これは偶然ではないという確信が生まれました。

松本氏が最初に手にした写本には、はっきりと左肩に「秀真伝」、右肩に「近江国高島郡産所村三尾神社神宝」という文字が刻まれていました。この「産所村」とは、継体天皇の母・振媛が三つ子を出産したという伝説が残る、命の息吹が満ちる場所。この三尾神社（現在の水尾神社）の境内には、「当社には神代文字書『秀真伝』40巻が伝わりました」という、歴史の証言が今も誇り高く刻まれています。

実は、『秀真伝』は長年「偽書」のレッテルを貼られてきました。「記紀」の時代は母音が8つだったのに、この書は現代と同じ5母音で書かれている――それが主な根拠でした。しかし、1970年代以降の言語学研究が進むと「8母音は渡来人がもたらした一時的な変化だった」という説が有力となり、今や偽書説の土台は

『秀真伝』全巻の写本が発見（1966年・平成4年）された日吉神社の神輿蔵

大きく揺らいでいます。そうした疑いは次第に説得力を失っていく一方で、むしろ『秀真伝』こそが真実を伝える貴重な古文書だと、その歴史的価値を支持する研究者が着実に増えてきました。

しかし、「本物かどうか」という問いに対する答えは、現代の学者よりもずっと前から、静かに届いていました。

江戸時代中期、滋賀県大津市に建つ天台宗の名刹「三井寺（園城寺）」の住職であった学匠「敬光」は、当時知られていた阿比留文字・豊国文字をはじめとする様々な神代文字を丹念に比較検証した大著『和字考』（１７９３年）を著しました。

空海と同じく遣唐使として唐（中国）に渡った「最澄（７６７年～８２２年）」を宗祖とする、密教とも深い縁を持つ天台宗の高僧が、宗派の枠を超えて「日本に漢字以前の文字は存在したのか」という問いに正面から向き合い、学術的な仕事として後世に残した貴重な証言です。その研究の中で特別に取り上げた文字の一つが、「ヲシテ文字」でした。

「他の神代文字とは何かが違う」――「敬光」がそう感じた理由は、ヲシテ文字には、宇宙の理を体系的に表現する内的な一貫性があり、密教の思想と深く共鳴する構造がその形の中に息づいていたからです。

三井寺は、『秀真伝』が守られ続けた高島のある近江の地と同じ滋賀の大地に立つ古刹です。現代

「秀真伝」が発見（1830年・天保元年）された三尾神社
（現在の水尾神社）

の学術論争より昔から、「ヲシテ文字」の真正性への問いは、この琵琶湖のある近江国という土地で始まっていたのです。

しかし私にとって、その確信の根拠は学術論争よりも、もっと直接的なところからやってきたのです。この『秀真伝（ホツマツタヱ）』を初めて読んだとき、強く感じたことがありました。私の「これは本物だ」という直感です。なぜかと問われても、論拠を一つひとつ挙げることは5年前の私には難しい。しかし確信には、理屈を超えたところで生まれるものがあります。その直感を後から裏付けてくれた出来事の一つが、縄文時代の「三内丸山遺跡（青森県）」の発掘でした。

1997年3月には国の特別史跡に指定された縄文時代前期（5900〜4200年前）の大規模集落跡地の「三内丸山遺跡」の調査では、縄文時代の人々が想像を遥かに超える豊かな暮らしを営んでいた「縄文文明」が存在していたことが明らかになりました。六本柱の大型建造物、長距離交易の痕跡、精巧な土偶の数々。学校の教科書で学んだ「縄文人は未開人だった」という常識が根底から覆され、「縄文文明」としての認識を新たにしたのです。そしてその暮らしぶりの詳細が、『秀真伝（ホツマツタヱ）』に記されていた内容と見事に重なっていました。6500年も前にこの書物に書かれていたことが、現代の発掘によって次々と事実として確認される。こ

江州山千光寺境内の枯山水と「ヲシテ文字」

の符合を「偶然」と片付けるには、あまりに鮮やかすぎます。

さらに驚くべき「一致」が、別の発掘現場でも待っていました。『秀真伝』に記された「39個の銅鐸を紐でまとめて埋めよ」という一節です。1996年の「加茂岩倉遺跡（島根県）」から、まさにこの記述を証明するかのように銅鐸39個がほぼ重なり合った状態で発掘されたのです。もちろん学術的な議論を待つ必要があるでしょう。しかし、『秀真伝』の圧倒的な「世界観」と「精神性」は、こうしたロマン溢れる考古学の発見とも呼応しながら、今、静かに私たちの魂を揺さぶり「本物」と扱われ始めています。

私の心を最も深く打ったのは、こうした考古学の符合以上に、長年の「歴史の謎」が解けた瞬間でした。「記紀」には、日本建国の中心人物「大物主（オオモノヌシ）」は一人の人間としては到底不自然なほどの長寿として描かれています。その矛盾が『秀真伝』を開いた途端、スッと溶けました。「大物主」とは個人名ではなく、現代でいう総理大臣のような代々受け継がれる役職名だったのです。その一語で、数世代にわたる功績を一人の人物に圧縮したことで生じた歴史の歪みが一気に霧が晴れるように整っていきました。なぜこれほどの真実が長く伏せられてきたのか。そのとき私の腹の底にストンと落ちたものこそ、歴史の深層に触れた確かな手応えでした。

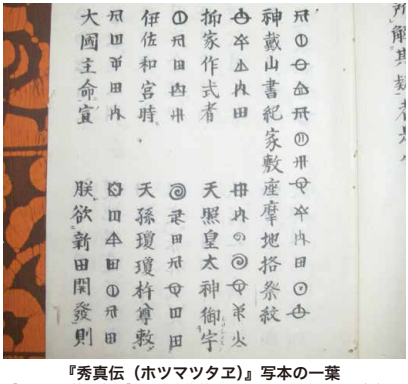
この壮大な『秀真伝』を編纂し、後世へと託した一人の男がいます。第12代景行天皇の時代、三輪山（奈良県桜井市）にある大神神社の祭神・大物主の末裔であり疫病を鎮めた英雄としても知られる、三輪臣の大田田根子（オオタタネコ）です。彼が、「指導者がいかにあるべきか」「人がいかに幸

せに生きるべきか」という、日本人が守るべき不変の道を後世に伝えるべく『秀真伝（ホツマツタヱ）』を編纂したからこそ、私たち現代人が古代からのメッセージを受けることができ、また次世代へと繋いでいくことができるのです。

この高島の地で発見された『秀真伝（ホツマツタヱ）』を、私は実際にこの目で確かめる機会を得て、吸い寄せられるように写本の前に立ちました。震える指先で、長い眠りから覚めたその書物に触れました。古びた紙が放つ、しんと冷えていながらも、どこか掌（てのひら）に吸い付くような温かい質感。そこに並んでいたのは、五七調の調べに乗って、清らかな「うた」のように舞い踊る文字でした。まるで呼吸をしているかのように、紙の上で躍動して見えたのです。

私は、一人の僧侶として、空海が持ち帰った経典や、数々の古文書にこれまで触れてきましたが、この『秀真伝（ホツマツタヱ）』が放つエネルギーは、それらとはまったく異質で、もっと生命の根源に近い何かだったのです。ページをめくった瞬間、視界が真っ白になるほどの衝撃が走りました。それは、霧の向こうに隠れた遠い神話などではなく、驚くほど鮮明な1万4000年前の古代第2次「縄文文明」時代からの「日本人の真の営み」そのものだったからです。

古書店での最初の写本の一部との出会い、高島の神輿蔵から完



『秀真伝（ホツマツタヱ）』写本の一葉
「天照皇太神御宇」「天孫瓊瓊杵尊」など、国土経営・天孫降臨に関わる記述が確認できる

璧な完本が現れたという発見のドラマ――しかし、あまり知られていない事実がもう一つあります。現存する『秀真伝（ホツマツタヱ）』写本が現在、国立公文書館（内閣文庫）※注に所蔵されています。元の所蔵者は内務省――すなわち、近代日本の国家行政の中枢にあった機関がこの文献を保管していたのです。単なる民間の伝承文書や偽作が、国家機関の書庫に収められることがあるでしょうか。「偽書」という烙印を押し続けることの難しさが、この一事実だけでも浮かび上がります。学術的な議論は今も続いており、すべてが解明されたわけではありません。しかしながら、国の機関がその保管を判断した書物を、私たちが「なかったもの」として見過ごし続けることも、また一つの歴史への不誠実さではないでしょうか。真実というものは、どれほど隠されようと決して消えはしないのです。

あなたが信じてきた歴史の隣に、もう一つの視点を置いてみてください。すると、これまでモノクロに見えていた日本の建国の姿が、急に鮮やかな色彩を帯びてカラー動画のように動き出します。効率や合理性に追われる日常から解き放たれ、自らの源流へと立ち返る心地よい旅の始まり。忘れかけていた心の潤いに満たされ、真っさらな朝を迎えるように目覚めていくのです。何千年も前から織り続けられてきた「アヤ（章）」のそれぞれの輝きが、不思議なことにあなたの人生という物語を、優しく、美しく包み込んでくれます。

私たち日本人の身体（ＤＮＡ）そのものが自然に覚えている「懐かしい記憶」。それは、雨の匂いや風のそよぎに神聖さを感じ、万物と共鳴して生きてきた、日本人なら誰しもが持っ

※注：
国立公文書館デジタルアーカイブ　https://www.digital.archives.go.jp/

ている「魂のふるさと」の感覚です。『秀真伝（ホツマツタヱ）』には、その確かな実感が古代の人々の体温とともに刻まれているのです。その体温の正体は、一つの言葉に凝縮されていました。国祖とも呼ぶべきクニトコタチの「ト」――たった一音、それが「ト・の教え」です。

●日本人のDNAに刻まれた究極の解答「ト・の教え」とは？

『秀真伝（ホツマツタヱ）』の根底を流れるのは、「トノオシエ（トの教え）」という不変の哲学です。「ト」という音は古代、非常にシンプルな「＋」十字のような形で描かれていました（本書37ページの表を参照ください）。縦の一本線は「天（大宇宙の大きな流れ）」、横の一本線は「地（私たちの暮らし）」を表しています。この縦と横が、どこにも偏（かたよ）らず、ぴったりと重なり合う「真ん中」の点。それが「ト」であり、日本人の心の原点である「調和」を意味しています（この不思議な「ヲシテ文字」については、後ほど34ページで詳しく触れます）。

ここで重要なのは、横の一本線、すなわち「地」を司（つかさど）るエネルギーが、ヲシテ文字では「オ」という響きで表されることです。「オ」は単なる音ではなく、天の意図がこの地上で形を成し、どっしりと落ち着く「結び」や「成就」を意味しています。そして、この「オ」の力が最も純粋に現れた聖地こそが、古くから「アワ・ウミ（淡海）」と呼ばれた私たちの「オウミ」近江の国・琵琶湖のある

滋賀県高島市エリアの江州です。

それは、今から気が遠くなるほど昔のこと。この日本という国が産声をあげたとき、みんなが幸せに暮らすためのルールを一番最初に決めた人物がいました。その名を「クニトコタチ」。日本人の精神的な「始祖・国祖」であり、私たちの遠い遠いご先祖様のような存在です。

「トの教え」とは、そんな始祖クニトコタチが定めた「この国の根本理念」のことです。現代でいえば憲法にあたる、国の土台となる考え方です。その根本理念に添った国造りに求められるのは、「国のリーダーたるもの、まずは自らの心を整え、民の幸せを祈ることである」というシンプルな指針でした。そして、この教えを人々がどう守り、その結果、どれほど穏やかな社会を築いたかということが、温かな「生きた事例集」として『秀真伝（ホツマツタヱ）』には記されています。

この「クニトコタチ」の教えは、天（ア）の理（ことわり）が、近江という地（オ）において、「実（ミ）」を結ぶことで、具体的な統治として完成しました。淡海＝近江（琵琶湖）が「日本のへそ」と呼ばれ、古来より重要な役割を果たしてきたのは、近江の国が宇宙のエネルギーを現実の形へと定着させる「オ」の琵琶湖の力が満ちた場所だったからにほかなりません。この生き方の「クニトコタチ」の「トの教え」は、琵琶湖畔の高島市か

日本の根本思想を定めた「クニトコタチ」の「トの教え」

ら滋賀県、そして日本全体を元気に甦らせたいという、私が空海の「密教」修行で辿り着こうとしているものと本質的に同じだったのです。

興味深いのは、この「ト（教え）」を次世代へ繋ぐ仕組みです。実は、私たちが当たり前のように使っている「嫁（とつ）ぐ」という言葉。それは「トを繋ぐ（ト・ツグ）」ことに由来していることが『秀真伝（ホツマツタヱ）』には具体的に書かれています。クニトコタチの「トの教え」を外に向けて説き広めるのが男性の役割なら、その真髄を「命のぬくもり」として、日々の暮らしの中で、脈々と次の世代へ繋いでいくのは女性の役割でした。

また、伊勢神宮に祀られる「トヨケ（豊受大神（とようけのおおかみ））」というお名前も、「ト（教え）」の「ヨ（世）」を「受ける」――つまり、クニトコタチの教えを守った理想の世の中を完璧に受け継いだ者、という意味が込められています。

このトヨケの神には、『秀真伝（ホツマツタヱ）』だけが明かす驚くべき正体があります。実はこの偉大な神は今生が「三度目の転生」――宇宙の根源から最初に生まれた神・クニトコタチ、そして「キノトコタチ」という姿を経て、長い年月のうちに積み重ねた智慧をすべて持ったまま、改めてこの世界に生まれ直した存在だったのです。幾度もの命を尽くして宇宙の法則を探求し続けた彼が、誰よりも深く「調和の道」を知っていたのは、当然のことでした。

天照大神（『秀真伝（ホツマツタヱ）』ではアマテルカミと記載）はこのトヨケから、クニトコタチの「トの教え」のすべてを継承しました。アマテルカミは「アメミヲヤ（宇宙万物の創造祖・真言密教では大日如来

と表現されます）によってアマヒ（太陽）からミタマが分け降ろされてヒト（人）に生まれた」と伝えられています。宇宙の根源から直接魂を分け与えられたその誕生からして、アマテルカミは「調和のバトン」を受け取るべき存在として、最初からこの世に送り出されていたのです。クニトコタチからトヨケへ、そしてアマテルカミ（天照大神）へと脈々と受け継がれてきたこの「調和の道」こそが、彼が力で支配するのではなく、「トの教え」によって国を治めることができた、その根底にある力（大日力）だったのです。

「トの教え」は、遠い神話の中だけに生きているのではありません。「嫁ぐ」という言葉が「ト」を継ぐことに由来するように、私たちが日々何気なく使っている言葉の中に、この「トの教え」の種は今も息づいています。聖徳太子の十七条憲法「和を以て貴しとなす」も、琵琶湖のほとりの高島市安曇川町にゆかりの近江聖人・中江藤樹が説いた「良知」も、その根は空海と同じ一本の種から伸びているのです。天の理を地に降ろし、この近江の地で6500年前に誠実に生き抜いた先人（縄文時代を生き抜いた人）たちの姿こそ、まさに「オ」の力を宿したクニトコタチの「トの教え」の体現そのものであったといえます。

●真言密教の宗祖「空海」も惹かれた「天・地・人の道」

日本の超古代史を伝える書物は、『秀真伝（ホツマツタヱ）』だけではありません。『上記（うえつふみ）』『宮下文書』『竹内文書』等々、いわゆる「古史古伝」と呼ばれる古文献が今も語り継がれています。これらはいずれも、中国から漢字が輸入されるより遥か以前から、日本独自の「阿比留（あひる）文字」「豊国（とよくに）文字」や「富士文字」等といった「神代（かみよ）文字」が存在していたことを伝えており、近年では古代遺跡から発掘された縄文土器にもその痕跡と思われる刻印や神代文字等が確認されるなど、単なる伝承の域を超えつつあります（詳しくは本書の第7章をご参照ください）。

しかし、これらの書物の多くは「いかに自分たちの家系が特別か」という権威付けや、神秘的な予言の記録に終始しています。そこが、『秀真伝（ホツマツタヱ）』とはまったく異なる点です。

では、何が違うのか。『秀真伝（ホツマツタヱ）』は、特定の誰かをヒーローにするための書ではありません。そこに記されているのは、時代が変わっても決して色褪せない、三つの「生きる道」です。

「天の道」――宇宙の法則、自然の摂理とともに生きること。

「地の道」――自分のためだけでなく、社会（国）全体の調和を願うこと。

「人の道」――家族愛や他者への思いやりを大切にすること。

『秀真伝（ホツマツタヱ）』が最も重きを置いているのは、「古代日本の精神（哲学）」そのものです。歴史的な事実以上に、神々の葛藤や後悔、心の歪みをどう正すべきかという「内面」に深くフォーカスしており、単なる歴史書を超えた「精神の実践書」としての側面を強く持っているのです。

現代の私たちが読んでも「そう、それが大切だよね」と自然に頷ける。誰かを排除せず、自分たち

◉縄文時代の日本に眠っていた、神秘の文字「ヲシテ」

教科書で学んだ約1600年前に漢字が日本に伝わるずっと前、私たちの先祖は独自の文字を約１万年以上も前から持っていました。それが、下記の記号のような形をした「ヲシテ文字」です。

円形に並んだこの下図は「フトマニ図」と呼ばれ、いわば古代の「宇宙の理（ことわり）を映す羅針盤」のようなものです。一つひとつの文字には、自然界のエネルギーや神様たちの役割が込められています。

この円を見つめることは、6500年以上も前の日本人が大切にしていた「世界のなりたち」を自らの心に響かせ、そして『秀真伝（ホツマツタエ）』の日本の建国パワーを観じることでもあるのです。

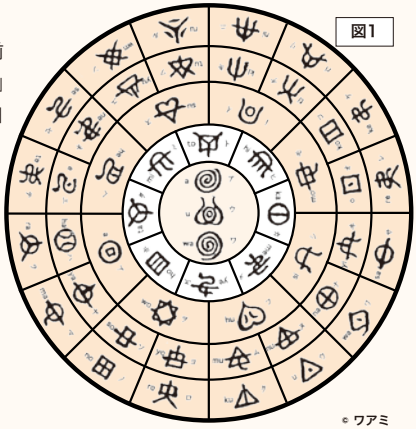


図1

© ワアミ

（「空海の秀真伝」研究会・本部資料）

右図の中央は、宇宙創造（大日如来）を表し、上の渦巻は天（神）から、下の渦巻は地（人）から見た宇宙を表しています。次の円の白地中の８つの囲みは、高島から世界へ出発した「睹（と）・補（ほ）・河（か）・昧（み）・袂（た）・微（び）・沃（ん）・佰（め）」の八人の王子を表しています（詳しくは第７章をご参照ください）。

◉天のエネルギーを呼び寄せる江州山千光寺の「アワのうた」

琵琶湖畔・高島の地に建つ江州山千光寺に、元国家シャーマンＳさんが㈲秀真歌伝の代表の成田さんと一緒にお越しくださいました。

元国家シャーマンＳさんは千光寺境内の地面に、上記の「フトマニ図」を広げ、その中心に密教の法具である「三鈷杵（さんこしょ）」をスッと立てられました。祝詞（のりと）が響き渡るなか、宇宙のエネルギーと交信して導き出されたのは、ここ江州山千光寺のためだけに授けられた、特別な「アワのうた」（本書の44ページを参照ください）です。

ス・ヤ・ル・サ・ア（5音）
ノ・ト・ノ・フ・ネ・オ・ユ（7音）
コ・ハ・キ・ソ・ミ（5音）

「五・七・五」のリズムにのせて、天より届いた言霊を綴ります。

この言葉を、毎日たった１分間唱えるだけで、心が前向きになり、体の調子も整い思考が現実化していきます。宇宙のパワー（大日力）を呼び寄せるこの響き、ぜひ本書と出会った皆様も日々の習慣として、健やかな暮らしに役立てて、心身ともに「元気に」になってください。　合掌

だけを特別視しない。この「開かれた普遍性」こそが、他の古史古伝と一線を画す、『秀真伝（ホツマツタヱ）』だけが持つ決定的な力なのです。

そして、この普遍性に最も深く共鳴したであろう人物が、空海でした。あらゆる宗教の教えは元は一つ、「太陽神」＝大宇宙をあまねく照らす「大日如来」であるという、空海が目指した密教の「すべてを包み込む」思想。彼がもし、日本の古代思想の源流を探していたとしたら、政治的な駆け引きに満ちた記録ではなく、この『秀真伝（ホツマツタヱ）』に宿る「天・地・人」の純粋な「生きる道」の哲学にこそ、魂を揺さぶられたはずです。

●縄文文明を支えた「ヲシテ文字」を見れば大宇宙がわかる
図形（形霊と言霊）の真実

漢字が日本に伝来したのは、約1600年前の4世紀から5世紀にかけてのこと。では、それ以前の日本人は何も書き残さなかったのか？――『秀真伝（ホツマツタヱ）』はそうではなかったことを教えてくれます。それが神代（かみよ）文字とされる「ヲシテ文字」です。

「ヲシテ」という言葉は、「教える（ヲシ）」と「手（テ）」が組み合わさったもので、「教えの根源」あるいは「神からの教えを記す手」という意味を持っています。一字一字が、大宇宙を構成するエネルギーそのものを視覚化した、いわば「人々が幸せに暮らす」ための設計図です。

その後、世の中には漢字という「意味をはっきりと決めるための文字」が広がっていきました。言葉を一つの意味に固定できる漢字はとても便利でしたが、その一方で、縄文文明を支えた「文字（形霊）」そのものが持っていたパワーすなわち大宇宙への「振動」や「波動」を伝える力（言霊）は、いつしか日本の歴史の裏側へと隠れてしまったのです。

しかし、真実というものは決して消え去ることはありません。それを証明してくれるのが『秀真伝（ホツマツタヱ）』です。この古文書に記された物語は全編がこの「ヲシテ文字」だけで綴られています。一つひとつの音（言霊＝ことだま。言葉に宿る霊的なエネルギー）と形（形霊＝かただま。文字の形そのものに宿る力）が、まるでパズルのピースが重なるように美しくも「力」強く響き合いながら、命の物語を今に伝えてくれています。

この『秀真伝（ホツマツタヱ）』に触れた人々が何よりも驚き、心打たれるのは、その圧倒的なまでに整った「一貫性」です。一万行という途方もない長さの物語が、すべて「五・七・五・七…」という極めて限られたリズムだけで、一糸乱れぬ美しさで綴られているのです。もしこれが、誰かが頭の中だけで考えたものであれば、これほど制約の厳しい枠組みの中で、宇宙の成り立ちから森羅万象の理までを、何ひとつ矛盾なく描き切ることなどできるはずはありません。

独自の文字体系を使い、流れるような五七の調べに乗せて大宇宙のすべてを表現し尽くす。そこには、単なる記録を超えた、文字通り「生きた歴史」の鼓動やパワーが脈々と息づいています。私はこの響きの中に、遥か昔から変わることのない、「真言」すなわち宇宙の真実を見つけ出すことができ

秀真伝の「ヲシテ文字」のカタカナ表記

図2

（「空海の秀真伝」研究会・本部資料）

© ワアミ

るのです。

ヲシテ文字は、母音と子音の組み合わせで構成された、驚くほど合理的な文字です。私がこの文字の形を見つめたとき、指先に宇宙の風を感じました。なぜなら、５つの母音「ア・イ・ウ・エ・オ」とその「かたち」、そこへ10の方向性を持つ子音が加わることで、48の音が生まれます。その様子は、37ページのように表で表すことができます。

例えば、表の「ア」という音を表す文字は、「〇」（円）の中央に点「・」が打たれた形（37ページ赤丸を参照）をしています。〇は宇宙の全体性を、中央の点はそこから生まれ出る根源のエネルギーが湧き出す様子を表しています。宇宙の始まりに、一つの光がぽつりと灯る――そのビジョンが、たった一文字の「かたち」（形霊）に込められているのです。

母音を基本形とし、そこに動きを象徴する子音の要素が加わる。中心から広がる「ア」に対し、エネルギーが立ち昇る「イ」、左右に広がる「ウ」など、形そのものが音の響きや意味と連動している点は、極めてユニークです。

文字を眺めているうちに、私はこのヲシテ文字の法則に気づき愕然（がくぜん）としました。空海が説いた宇宙の理（ことわり）が、なぜこの縄文時代の文字に刻まれているのか？ 私は暗闇の中で不思議な「光」を見つけたような心地でした。

文字を見れば宇宙がわかる。宇宙を知れば文字の意味がわかる。この完璧な対応関係は、単なる模倣（もほう）や偶然では決して生まれ得ない、卓越した縄文文化と思想がすでに６５００年前の縄文文明にあっ

たことを示しています。後の約1300年前の「記紀」が、日本語を書き残すために外来の漢字を無理やり当てはめた「万葉仮名」を用いたことと比較すれば、縄文文明のヲシテ文字がいかに先進的で、世界の四大文明でさえ類を見ない自律した文化体系であったかがよくわかります。

「ヲシテ文字」の一つひとつが、宇宙の構造やエネルギーの動きと寸分の狂いもなく連動している。これは、まさに「宇宙の設計図」そのものです。ヲシテ文字を見つめること、そしてその形を丁寧になぞることは、自分という存在を宇宙のリズムに調律する「最高の瞑想」となるのです。それは密教の「阿字観」という修行と同じであるため、私は驚きを隠せませんでした。

さらに私の心を打ったのは、このヲシテ文字と「夜空」との、息を呑むような深い繋がりです。『秀真伝』には「スバル（プレアデス星団）」など、特定の「星」が重要な場面に登場します。古代の日本人にとって、星々は単なる夜の装飾ではありませんでした。農耕の時期を知らせ、方角を示し、宇宙の大いなる流れを読み取るための「天（神）の言葉」だったのです。

実際、48のヲシテ文字の形を夜空と重ね合わせると、その幾何学的な記号が北斗七星やカシオペア座、オリオン座など、実際の星々の配置と呼応するような構造を持っていることに気づかされます。文字は地上の言語であるのみならず、夜空の星座を写し取ったものでもあっ

ヲシテ文字とひらがなの対照表
（本書の後見返し参照。「空海の秀真伝」研究会・本部資料）

た――。その可能性は、古代人が大地と宇宙を一体として捉えていたという『秀真伝（ホツマツタヱ）』の根本思想と、見事に重なります。縄文人は、澄み渡る夜空を見上げながら、天の星の配置をそのまま文字の「かたち」（形霊）として見事に地上に写し降ろした。宇宙の地図を、一文字一文字の「ヲシテ文字（48種類）」に封じ込めたのです。

だとすれば、ヲシテ文字の一つひとつを声に出して読み上げるとき、私たちは単に文字を発音しているのではありません。６５００年以上も前のいにしえの時代の縄文人が、澄んだ夜空を仰ぎながら感じていた「星空のリズム」を、自らの声（言霊）と身体で「ヲシテ文字」の形霊をなぞっていることになるのです。

●ヲシテ文字と一致する「五輪塔（ごりんとう）」の不思議

私たちの身近な場所に、ヲシテ文字の「形霊」の力が、姿を変えて息づいているのをご存じでしょうか。お寺や墓地で目にする、不思議な形の石塔「五輪塔（ごりんとう）」です。

五輪塔は、下から順に「□（地・四角）」「〇（水・円）」「△（火・三角）」「∩（風・半月）」「宝珠（ほうじゅ）形（がた）（空）」という五つの図形（形霊）を積み重ね、宇宙を構成する５大要素を象徴しています。これは、空海が唐より日本にもたらした密教の宇宙観そのものです。

空海は「この宇宙のすべて（五大）は（宇宙）大日如来の現れである」と説きました。つまり、五輪塔を建てることは、そこに宇宙の真理を丸ごと具現化させ、故人を仏の懐へと導く「聖なる装置（パワースポット）」を設置することでもあったのです。

驚くべきことに、この五輪塔の思想は、ヲシテ文字の構造と完璧に一致しています。ヲシテ文字もまた、「〇（ア・天）」「□（イ・地）」「△（ウ・火）」といった基本図形（形霊）を組み合わせて成り立っているからです。空海が「形（形霊）」によって宇宙を表現し、魂の救済を試みたように、約6500年前の縄文人もまた、一文字一文字の「形（形霊）」の中に宇宙のエネルギーを封じ込めて、先祖崇拝していたといえるでしょう。

空海にとって、文字は単なる情報の伝達手段ではありませんでした。私の師匠は文字そのものを、神仏が宿る「聖なるシンボル（形霊）」として捉えていました。古代インドの「サンスクリット語」の「梵字（ぼんじ）」を「仏」そのものとして尊（とうと）んだ空海にとって、「形（形霊）と音（言霊・真言）」が宇宙の真理と一致するヲシテ文字の体系は、まさに6千年以上前に「日本に眠っていた密教」として映ったに違いありません。

五輪塔を観じれば宇宙の調和がわかるように、ヲシテ文字を書けば、その「かたち（形霊）」を通じて私たちの内なる神性が宇宙の波長とシンクロし始めます。時代も場所も異なる二つの叡智（えいち）が、なぜ同じ構造へと辿り着いたのか。そこには空海の教えである「神仏（しんぶつ）

不思議な五輪塔
（高野山金剛峯寺）

同座（どうざ）＝真理は一つ」という揺るぎない事実があります。文字の形（形霊）を眺め、その響きを口（言霊）にする。それだけで私たち日本人は時空を超え、古代の日の本の神々が築いた調和の世の中、すなわち「天の道・地の道・人の道」＝「宇宙の源流」へと立ち戻ることができるのです。

●唱えるだけで心と体が整い元気になる、不思議な「アワのうた」

ヲシテ文字という「かたち」（形霊）に宿るエネルギー。それがひとたび音や声（言霊）として放たれたとき、私たちの身体に、そして空間には何が起こるのでしょうか。

『秀真伝（ホツマツタヱ）』の言霊の力は、実は私たちが毎日何気なく使っている言葉の中に、今も生きています。

試しに、方角の名前を思い浮かべてください。

「東（ひがし）」――日（**ひ**）の頭（**かし**）が昇る方向。日頭（ひかし）が転じたものです。

「南（みなみ）」――皆（**みな**）が見（**み**）る、明るい方角。

「西（にし）」――煮（**に**）えた太陽が沈（**しず**）む方向。

「北（きた）」――人が来（**き**）て、帰った（**た**）場所。

東西南北と言われてみれば、そうかもしれないと感じませんか。これは偶然の語呂合わせではありません。古代の日本人が宇宙の動きを言葉に封じ込めた「生きた設計図」の痕跡です。言霊（真言）の力は、6500年の時を超えて、あなたの口から発する言葉の中に今もしっかり息づいているのです。その謎を解く鍵であり、『秀真伝（ホツマツタヱ）』が現代に伝える究極の「心」と「体」の調律法、それが「アワのうた」です。

今から6500年以上もの大昔に、人々の言葉が乱れ、心や社会までもが混乱を極めた時代がありました。この危機に立ち上がったのが、日本人の総氏神である「天照大神（あまてらすおおみかみ）」の両親である日本の始祖、イザナギ・イザナミの二神です。当時、言葉の乱れは単なるコミュニケーションの問題ではなく、「心の歪み」や「身体の不調」そのものであると考えられていました。そこで二神は、48の音を完璧な調和をもって配列した「アワのうた」を編み出し、自ら全国を巡って民衆に教え歩いたのです。

人々の乱れた「話し言葉」を正し、それによって乱れた精神と肉体を本来の健やかな状態へと戻す。いわば、言葉による全身のデトックスであり、魂の調律でした。ヲシテ文字が持つ「形（形霊）」のエネルギーが、声という「振動（言霊・真言）」に乗って自分自身の細胞の隅々にまで浸透していく――。「アワのうた」を口にするとき、私たちは数千年前から受け継がれる聖なる大宇宙へ向けた響きと共鳴（言霊・真言）として、自分自身を根源から癒やし元気になることができます。

「アワのうた」

（天の24音）

ア カ ハ ナ マ
イ キ ヒ ニ ミ ウ ク
フ ヌ ム エ ケ
ヘ ネ メ ヲ コ ホ ノ

（地の24音）

モ ト ロ ソ ヨ
ヲ テ レ セ ヱ ツ ル
ス ユ ン チ リ
シ 𛀁 タ ラ サ ヤ ワ

この24音ずつの上下二句、合計48音には、宇宙のすべての響き（言霊）が網羅されています。

私が初めてこの「歌」を声に出した瞬間のことを今でも忘れられません。「ア」から始まった音が、胸の奥の、普段意識していない場所に触れた気がしたのです。空海の古代インドのサンスクリット語で「真言」を唱えるときの、天（宇宙）から「大日如来」の大日力（パワー）を引き降ろすような感覚と似た、自分の中に元々あるものが静かに目を覚ます感覚でした。「アワのうた」という名には、宇宙のサイクルがそのまま封じ込められているのです。

「ア」はすべての始まりである「天（アメ）」を、「ワ」はすべてを調和させる「地（ツチ）」すなわち天地＝宇宙を象徴しています。この「歌」を口ずさみ、「ア」から始まり、すべての音を巡って「ワ」に辿り着くとき、天と地のエネルギーが自分の中で一つに繋がります。魂が天から降りてきて、地上

で経験を積み、最後にすべてを統合して大地に還っていく――。そんな生命の循環そのものを一唱のうちに描き出すことこそが、「アワのうた」に秘められた根本原理、空海の説く「即身成仏」（悟り）の境地なのです。

さらに、すべての音は「母音（五つの父）」と「子音（十の母）」の組み合わせによって成り立っていることがわかります。ヲシテの宇宙観では、音の最小単位を次のように定義しています。

●五つの父（母音）　∴「**ア・イ・ウ・エ・オ**」の五つの基本エネルギー。
●十の母（子音）　∴「**アカサタナハマヤラワ**」の十の方向性。

この「五つの父」と「十の母」が出会い、交わることで、この世の万物（八百万（やおよろず）の神々）を表現する48の音（言霊・真言）が生まれます。例えば、「ア」という母音は天のエネルギーを、「カ」という子音は強さや結びつきを象徴します。これらが組み合わさることで、特定の周波数（響き・震動）が生まれるのです。

口を大きく開いて発する「**ア**」は根源のエネルギー。そこから意志を持って進む「**イ**（命）」が生まれ、形をなす「**ウ**（生）」へと繋がります。枝葉が伸びるように発展する「**エ**（枝）」を経て、最後に円満に統合される「**オ**（緒）」へと結実するのです。つまり「**アイウエオ**」と発声することは、「無」

からオーラパワー（大日力）が生まれ、完成するという「成功（幸せ）のプロセス」を、自らの肉体を使ってポジティブ思考へと変化させて追体験することなのです。

私たちの身体を一つの楽器だとしたら、日々のストレスや乱れた言葉遣いは、弦を緩ませ、音を狂わせてしまいます。「アワのうた」は、その狂ってしまった弦を一本一本丁寧に締め直し、本来の美しい音色に戻すための調律です。

『秀真伝（ホツマツタエ）』の「アワのうた」の48音の一つひとつは、自然界の五大要素や私たちの身体の特定の部位・臓器と共鳴するようにできています。例えば、「**カ**」という音は「火」や「力」の性質を持ち、情熱を燃やしたい時に力を貸してくれます。一方、「**マ**」という音は「水」や「真」の性質を持ち、荒立った心や「ストレス」を鎮めてくれます。これは空海の真言密教とも通じる理屈です。密教でも目的によって唱える真言（音）を変えますが、「アワのうた」もまた、言葉を「意味」としてだけでなく、現実を前向きに動かす「物理的な力」として扱って思考を現実化しているのです。

「アワのうた」が持つもう一つの重要な要素、それが「五七調」のリズムです。日本人の魂には、五・七のリズムが深く刻まれています。これは私たちが母親の胎内で聞いていた心拍の音や、深呼吸の周期に最も近い、生命の安らぎのリズムです。五七調に乗せて声を出すことで、自然に心拍が落ち着き、脳波は深い瞑想状態（アルファ波）へと導かれます。

まず、この「アワのうた」を声に出してみてください。「**ア・カ・ハ・ナ・マ――**」それだけでいいのです。あなたの身体が先に覚えている48音の波紋が全身の細胞、血流、そして神経から脳へと広

がっていきます。ヲシテ文字が持つ「形（形霊）」のエネルギーが、声という「振動」に乗って細胞の隅々にまで浸透していく。それは、長年のストレスで「ささくれ」ができてしまった魂を、優しく撫（な）でて滑らかに整えていくような、極上のヒーリング体験なのです。

実際、この「アワのうた」を唱え始めた方々からは、「不思議とイライラしなくなった」「よく眠れるようになった」「自分を取り囲む空気感が変わった」という感想が多く寄せられます。これは超自然的な奇跡ではなく、「音（言霊）」の振動によって、あなたの心身が本来あるべき「調和の取れた状態」に戻った結果なのです。かつて古代の縄文時代の人々は、このように「音」の持つ力を日常的に使い、心身の健康や社会の平和を保っていました。

「アワのうた」の最も素晴らしい点は、誰にでも今すぐできる「実践の大日力」にあります。難しい理屈を覚える必要も、私たち僧侶や修験道の山伏の皆様のように厳しい修行に耐える必要もありません。ただ、この「アワのうた」を「声に出して詠む」。それだけでいいのです。

天（大宇宙）に向かって「声を出す」という行為は、自分の内側に眠る命の火を灯し、現実という大海原を動かしていくための「最初のエンジン」をかけることです。宇宙の響きを宿した「アワのうた」を口ずさむとき、あなたのこれからの人生はより力強く、より前向きに、そして笑顔となり、より輝かしく「幸せ」になるために動き始めていくのは間違いありません。

●空海の「いろは歌」に秘められた、私たちへのメッセージ

空海が、唐（中国）の長安から帰国し開いた教えを「真言宗」と名づけたのは、偶然ではありません。「真言」とは、彼が出会った古代インドの言葉・サンスクリット語の「マントラ」の漢訳で、「真実の言葉」を意味します。空海はこの宗派を「密教」とだけ呼ばずに、あえて「真言密教」と呼びました。それは「真実の言葉による仏教の秘密の教え」という意味を込めた、空海自身の命名の意志があったからです。

真実の言葉とは何か。それは単なる意味の伝達を超え、「声」に出すことで、音そのものが「呪文（言霊）」となり、宇宙の振動と共鳴し、現実を動かす「力」を持つ言葉のことです。この考え方が、『秀真伝（ホツマツタヱ）』の「アワのうた」の原理と完全に重なっていることは、もはや偶然とはいえません。

「これこそが、人々を救う最強の力だ」――そう確信して日本へ帰ってきた空海ですが、帰国後、ある事実に気づき、雷に打たれたような衝撃を受けます。

「……待てよ。この響きは、初めて聞くものではない」

空海が、インド直伝の真言の中に見出した「大宇宙の摂理」。それはなんと、遠い６５００年も前から、すでに日本に『秀真伝（ホツマツタヱ）』により存在していた「アワのうた」の文字（形霊）と声（言霊）を出すリズムそのものだったのです。

五七調の調べに乗せて、イザナギ・イザナミの時代から脈々と受け継がれてきた高島の『秀真伝（ホツマツタヱ）』の中に、空海が求めた「言霊（真言）」の奥義は、すでに縄文時代には完成されていました。青い鳥は、遠い異国ではなく自分の家（国）の軒先、琵琶湖の安曇川町にあった。稀代の天才・空海はこのとき、中国ではなく6500年以上も前の古代日本の古層に眠る叡智の深さに魂を震わせたに違いありません。

空海が、中国・長安の青龍寺の密教の最高位（第七祖）恵果阿闍梨から学んだ密教の奥義の中で最も重要とされる「三密」と「加持祈祷」から発する「大日力」。その中心にあるのが「口密」、すなわち真言を声に出すことです。密教の最高位（第八祖）の地位（遍照金剛）を継承して帰国した空海は、その真言の体系を深く探るうち、驚くべき一致に気づきました。古代インドの梵字（「サンスクリット」語）で組み立てられた宇宙の音の体系が、6500年以上前から日本人の口から口へと伝えられてきた「アワのうた」の48音と、構造としてピタリと重なっていたのです。

私の師匠である『空海』がこの真言密教の奥儀の一致に気づいたとき、どれほどの衝撃が走ったか。その魂の震動を、私は「空海の代理人」として、自分自身の皮膚で感じるほどに分かち合っています。だからこそ、この驚きを皆さんに伝えずにはいられないのです。

そしてその確信を胸に、空海は琵琶湖に浮かぶ「竹生島」へ向かいます。湖面を渡る風の音、岸に打ち寄せる波の響き。水と神気が交わるこの聖域で、三つの目覚めが一本の線に繋がりました。

若き日の室戸岬で、大自然と溶け合い「己と宇宙は一体である」と体感した第一の悟り。唐で密

教の後継者としてすべての奥儀を第八祖としての修行を経て、万物（八百万（やおよろず）の神々）を大日如来の現れとして体系的に捉えた第二の悟り。そしてこの「竹生島」で到達した第三の悟り――それは、遠くインドで生まれた「真言」と、縄文の時代から日本人の「声」に宿り続けてきた「言霊」が、実は同じ一つの根から伸びていたという、魂を根底から揺さぶる発見でした。空海が、最後にこの竹生島で開花させたこの「第三の悟り」こそが、日本の言霊と宇宙の真理・摂理を一つに結び、誰もが使える智慧へと昇華させた、究極の到達点だったのです。

古くから、空海が作ったと語り継がれてきた「いろは歌」。彼はその悟りを、誰にでも口ずさめる47音の歌に封じ込めました。『秀真伝（ホツマツタヱ）』の「アワのうた」は48音。それに対して、空海の「いろは歌」はあえて一音少ない47音で綴られています。なぜ、一音足りないのか？ 私にはずっと違和感がありました。ある夜、空海のお導きにより、ふと「いろは歌」を口ずさんだとき、私の背中に電流が走りました。

いろはにほへ**「と」**　ちりぬるをわ**「か」**　よたれそつね**「な」**
らむうゐのお**「く」**　やまけふこえ**「て」**　あさきゆめみ**「し」**　ゑひもせ**「す」**

竹生島の弘法大師（空海）庵跡

私は空海から得たヒントにより「いろは歌」を七音ずつ区切り、末尾の文字を繋ぎ合わせると浮かび上がる「とかなくてしす（咎無くて死す）」という、師匠から弟子へのあまりに切ないメッセージ。一見、仏教の無常観を歌っているように見える「いろは歌」。しかしその裏側には、神代の昔「アワのうた」から続く、「音で宇宙と共鳴し、現実を動かす」ための声が「空海コード」として隠されていてびっくりました。

足りない一音――それは「**ん**（ン）」です。日本語の中でただ一つ、言葉の先頭に立つことができない、すべての終わりにだけ宿る特別な音。試しに「ん」と声に出してみてください。日本語の音はすべて口を開いて始まります。しかし「ん」だけは違う。口を閉じたまま、内へ内へと還っていく、完結と沈黙を象徴する唯一の音なのです。

そして、仏教の世界には「阿吽（あうん）の呼吸」という言葉があります。「阿（ア）」がすべての始まりを表すなら、「吽（ン）」はすべての終わり・完結を象徴します。つまり『秀真伝（ホツマツタヱ）』「アワのうた」の48音は、「**ア**」から「**ン**」まで揃うことで、宇宙の誕生から完結までの全サイクルを表す「宇宙の完璧な円環」となっているのです。

空海はその「終わり」を象徴する音「**ん**」を、「いろは歌」から意図的に抜き取りました。それはただの省略ではありません。「私はこの使命を完結させることなく、この世を去る」――。いろは歌の末尾に隠された「**とかなくてしす**」という絶命の言葉と、「**ん**」の欠落。二つのメッセージが重なっ

たとき、高野山で即身成仏（死んでからではなく、今生きているうちに仏に成ります「成仏します」ということ）を実践なされた『空海』の多くの方々を「幸せ」にするための覚悟の深さが、私の胸に直接刻まれるように伝わってきます。

もし、漢字伝来以前の日本に、それを凌駕する知恵があったと公言すれば、国を揺るがす「危険な思想」と見なされかねません。古来の「ヲシテ文字」が持つ強大な「力」をいわば**「空海コードの〝暗号〟」**として隠さざるを得なかった空海の苦渋の決断が見えてきます。空海は、自らが築き上げた真言密教の土台を守りつつ、同時に「日本の根源」を次世代へ繋ぐため、あえて沈黙し、真実を「弥勒の世界」まで持っていく道を選んだ。そう私は考えています。

空海は、表向きは「すべては移ろう」という仏の教えを説きながら、その裏側に、命を懸けて守り抜いた「封印された真実」を忍び込ませました。

「ん」という一音を隠し、重層的な意味を施すことで、いつか未来の私たちが「本当の言霊の力（大日力）」に気づくことを、約1220年もの間、静かに待っていたのです。そして、その「気づき」を、今を生きる皆さんに届けること。それが、空海の弟子としての私の使命なのです。

●縄文の神々と空海が私たちに託した「魂のバトン」

縄文文明の『秀真伝（ホツマツタヱ）』から伝わる「アワのうた」の記憶（ＤＮＡ）、そして空海が密かにその響きを託した「いろは歌」。これらの音の響きは、時代を超えて私たちの細胞を震わせ、本来の健やかさと調和を自分自身の中にある『宝』を取り戻させてくれます。

しかし、なぜこれほどまでに完璧な調和の文化が、歴史の表舞台から姿を消さなければならなかったのでしょうか。その謎を解く鍵は、この日本列島の「へそ」ともいえる、ある特別な聖域に隠されていました。その聖域とは、近江の国・琵琶湖のほとり「高島」です。私が住職（僧侶）として江州山千光寺で活動するこの地こそが、『秀真伝（ホツマツタヱ）』が命懸けで守られ、そして現代に蘇った舞台です。この書物がなぜ高島でなければならなかったのか。そこには、近江の国（琵琶湖）の持つ自然・人・歴史という三つの力と物凄いパワーが重なり合った、世界的に類を見ない「聖地」である深い必然がありました。

空海が琵琶湖に浮かぶ「竹生島」で天を仰いでから、およそ１２２０年の時が流れた今日、空海が遺したバトンは、誰の手に渡ったのでしょうか？　立派な高僧でしょうか？　それとも、著名な学者でしょうか？　いいえ、違います。空海のお導きによってそのバトンを受け取ったのは、自他ともに認める空海の「一番出来の悪い弟子」。近江の国・江州山千光寺の玄津――そう、この私だったのです。

「なぜ、私が？」――私自身が一番驚いています。しかし、真実を伝えるために必要なのは「権威」ではなく、バカと言われるぐらいの「愚直なまでの真摯さ」です。優秀な弟子なら、理屈や常識で考えて立ち止まったかもしれ

ません。出来の悪い弟子だからこそ、空海が守り抜いた「祈り」の重さが、私の心に痛いほど響いて、私の使命だと観じたのです。

私は導かれるようにして『秀真伝（ホツマツタヱ）』に出会い、古代文字「ヲシテ文字」、宇宙の響きを宿す「アワのうた」が放つ大宇宙からのエネルギー（大日力）に触れました。そして確信したのです。これは単なる古文書研究ではない。大宇宙の真理であり、私たちが幸せに生きるための「摂理」そのものなのだと。

だからこそ私は、この高島の地で一つの決断をしました。空海が竹生島で開花させた悟り、そして『秀真伝（ホツマツタヱ）』が伝える「調和の摂理」を、現代を生きる皆様とともに学び、次の時代へ繋ぐ場をつくろうと。それが、私が立ち上げた「空海の『秀真伝（ホツマツタヱ）』研究会・本部」です。

まずは『秀真伝（ホツマツタヱ）』の素晴らしい世界に触れてみてください。そこには、私たちが忘れていた６５００年前の「日本の原風景」が、タイムトラベルしたように今も鮮やかに広がっています。国祖・クニトコタチの「トの教え」による日本の建国、そして日本人の「心」の起源を、魂の底から理解できる唯一の扉を、パワースポット「竹生島」へ参拝して、私と一緒に本当の心が癒される旅の扉を開けてみましょう。